

NO.27

安田火災東郷青児美術館ニュース

N  
SEIJI TOGO MEMORIAL  
YASUDA KASAI MUSEUM OF ART  
NEWS

# EXPOSITION MAURICE UTRILLO



《モンマルトルのルヴアン通り》1911年頃 all works : ©Jean Fabris, 2002 ©ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo 2002

モンマルトルの憂愁  
ユトリロ展

2002年4月20日[土] 6月9日[日]

# INFORMATION 2002.4 2002.10

## 2002年4月20日[土] 6月9日[日] 特別展 **コトリ口展** モンマルトルの憂愁

初期の「モンマニーの時代」から「白の時代」を経て晩年の作品まで、日本初公開の作品を含めた80余点のコトリ口作品を展示。作品の半数以上が日本初公開。  
月曜日休館(但し4月29日、5月6日は開館)午前9時30分～午後5時(金曜日は午後7時まで)入館は閉館の30分前まで  
入館料=一般1000円(800円)大高生600円(500円) 内は前売および20名以上の団体料金、シルバー(65才以上)800円、中・小生無料

## 2002年6月15日[土] 7月25日[日] 特別展 **ヴラマンク・里見勝蔵・佐伯祐三展** ゴッホの影響を探る 個性主義芸術の誕生

ゴッホの影響を受けたヴラマンク。ヴラマンクに師事した里見勝蔵と佐伯祐三。約90点で三人の影響関係を探る。  
月曜日休館 午前9時30分～午後5時 入館は4時30分まで  
入館料=一般800円(600円)大高生600円(500円) 内は20名以上の団体料金、シルバー(65才以上)800円、中・小生無料

## 2002年8月1日[木] 9月16日[月] 特別展 **中村コレクション秘蔵の名品 コロー、ミレー、バルビゾン**の巨匠たち展

コロー、ミレー、ルソーなどバルビゾン派と呼ばれる自然主義の画家たちの作品100点を、国内有数の個人コレクションから公開。  
月曜日休館 午前9時30分～午後5時(金曜日は午後7時まで)入館は閉館の30分前まで  
入館料=一般1000円(800円)大高生600円(500円) 内は20名以上の団体料金、シルバー(65才以上)800円、中・小生無料

## 2002年9月21日[土] 10月20日[日] 第25回安田火災東郷青児美術館大賞受賞記念 **和田義彦展**

前年活躍が顕著な画家一人を選考、顕彰する「安田火災東郷青児美術館大賞」受賞作家の受賞記念の個展。  
月曜日休館(但し9月23日、10月14日は開館)午前9時30分～午後5時 入館は4時30分まで  
入館料=一般500円、大・高生300円(20名以上の団体は各100円引き) 中・小生無料

## 2002年10月26日[土] 12月8日[日] **スーラと新印象派展**

月曜日休館(但し11月4日は開館)午前9時30分～午後5時(金曜日は午後7時まで)入館は閉館の30分前まで  
入館料=一般1200円(1000円)大高生800円(600円) 内は前売および20名以上の団体料金、シルバー(65才以上)1000円、中・小生無料

# TOPICS

## 選ばれた新進作家たち 第21回安田火災美術財団選抜奨励展 3月9日～4月14日開催 入賞者報告

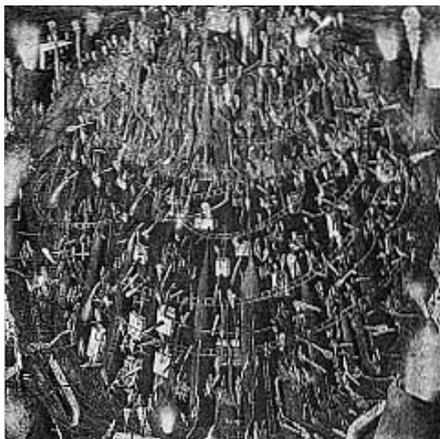
安田火災美術財団では選抜奨励展開催に先立ち、2月27日(水)に出品作品の審査会を行った。審査員は寺坂公雄、瀧 梯三、宝木範義、ワシオトシヒコ、福本章、笠井誠一、澄川喜一の各氏に財団関係者2名を加えた9名。入賞者は下記のとおり。

### 絵画部門

安田美術賞	矢元政行	《回旋塔》アクリル・油彩
秀作賞	伊藤龍彦	《夜:// flower shop.》油彩
	鈴木義伸	《起》油彩
	仲山瑛子	《抱擁 2》油彩

### 彫刻部門

新作優秀賞	二藤規朗	《個の遺蹟》ブロンズ・木
新作秀作賞	陳 漢	《掘り出された記憶》樹脂・漆・石膏等
	松尾大介	《畜》木・布・銅板



矢元政行《回旋塔》

## 第25回安田火災東郷青児美術館大賞は和田義彦《想》に決定

今年で第25回を迎える安田火災東郷青児美術館大賞は、和田義彦(わたよしひこ)氏の《想》油彩・キャンバス 162×194(130F)に決定いたしました。  
和田義彦氏は、人物群像や、こども女性像のモチーフを中心とする具象画を描き続けてこられました。優れたデッサン力に裏づけられた力強い筆勢や、濃密な配色と陰影を特徴とし、描線や彩色にも独特の表現スタイルを確立されています。《想》は、完成度、先質において圧倒する内容をもっており、技の研鑽を積んできた本格派の画家の作品として受賞が決定いたしました。  
和田氏は、1940(昭和15)年三重県生まれ。東京芸術大学大学院油画科修了、1972年にはイタリア政府給費留学生としてローマ美術学校に学び、次いでローマ国立中央修復学校に編入、またスペインで研究模写を重ねるなど、ヨーロッパの伝統的な古典技法を深く学んでこられました。個展やグループ展などで精力的な制作活動を続けられており、現在、国画家会会員であり、名古屋芸術大学教授をつとめておられます。授賞式は2002年6月、受賞記念展は9月21日[土]から10月20日[日]まで開催が予定されています。



受賞作品《想》2001年

## 「東郷青児展 大正・昭和のモダニスト」(ふくやま美術館2002年2月9日～3月17日)に出品

当館および安田火災海上保険株式会社が所蔵する東郷青児作品40点(油彩32点、水彩4点、彫刻4点)が、広島県福山市のふくやま美術館で開催された「東郷青児展 大正・昭和のモダニスト」に展示されました。同美術館、福山市教育委員会、読売新聞社大阪本社の主催で、イタリア未来派を所蔵作品の柱の一つとするふくやま美術館が、デビュー当初未来派に深く関わった東郷青児を取りあげ、その画業を振り返る内容の展覧会です。国内から集められた東郷の作品は、初期から最晩年まで、油彩、水彩、彫刻および初公開の家具デザインなど60点、その他竹久夢二、古賀春江など戦前の東郷ゆかりの作家の作品、東郷とイタリア未来派の関連を示す資料も合わせて100余点の充実した展示で、多くの来館者を迎えました。また初日の開催記念座談会では、東郷青児の長女の画家たまたみ氏が父の思い出や秘話を披露し、詰めかけた聴衆を沸かせました。



## ヴラマンク、里見勝蔵、佐伯祐三展

6月15日[土]~7月25日[日]

1901年パリ、ラフィット街のベルネーム=ジュヌ画廊で開催された『ゴッホ回顧展』。安田火災東郷青児美術館の《ひまわり》とひろしま美術館の《ドービニーの庭》を含む71点が展示された。この展覧会を見たヴラマンクは「父よ!先ゴッホを愛する」と叫び、ゴッホの個性的な原色の色彩対比や強烈な筆触に打ちのめされた。その後ヴラマンクは、ドラン、マティスと共にフォーヴィスムに傾倒するものの、生涯を通じて彼の理想とした絵画はゴッホが制作したような存在力のある絵画であった。一方、里見勝蔵は『白樺』でゴッホとセザンヌを知り、「ゴッホ、セザンヌを勉強するためにフランスへ行く」と決意した。1921年3月に「白樺美術館第1回展」に出品されたゴッホの《ひまわり》とセザンヌの《水浴》を里見は展覧会より先んじて我孫子に住む武者小路実篤を訪ねて見せてもらった。同年5月にパリへ到着するや否や、ルーヴル美術館、ルクサンブル美術館などでゴッホ、セザンヌ作品を見つめていた。9月にオーヴェール・シュル・オーワーズでゴッホの墓参りをし、ポール・ガシェ宅で見たゴッホ作品から「絵で表し得る事の出きる限りを超えている。何と荘厳、死を思わせる神秘」と感銘する。里見はゴッホが捉えた《オーヴェール教会》《村役場》などを写生中にヴラマンクと遭遇する。この運命の出会いによって里見とヴラマンクとの交流は生涯続く事となり、ヴラマンクの指導を受けて「理屈を嫌悪し本能に従い感動を描く」ようになる。

佐伯祐三は「白樺美術館第1回展」を見逃し、麹町の武者小路邸で《ひまわり》を見せてもらいその模写をしたという。里見が渡仏して

2年半後、佐伯はパリで里見と合流した。佐伯はパリのアトリエにゴッホ《ひまわり》の複製画を貼りつけた。佐伯は次第に里見を通じてヴラマンクへの好意と関心を増幅させ、里見へヴラマンクの紹介を頼んだ。佐伯がヴラマンクへ自信をもって見せた《裸婦》に対して、ヴラマンクは「このアカデミズム!」と怒鳴り続けた。佐伯はこの挫折から立ち上がるべく、アカデミックな画風から脱却し、対象物の質感を追求し「純粹」な絵画をめざした。

ヴラマンク、里見、佐伯の油彩作品約90点で、ゴッホの影響を受けながら個性主義を確立していった三人の画風の変遷、影響関係を紹介する。本年はゴッホ生誕150年である。



佐伯祐三  
《新聞屋》  
1927年  
油彩、73.6×60.2cm  
朝日新聞社蔵

## 中村コレクション秘蔵の名品

### コロー、ミレー バルビソンの巨匠たち展

11月3日[土]~12月9日[日]

バルビソンはパリの東南に位置する村で、フォンテーヌブローの森の北西の端にある。中世以来王侯貴族の狩猟場として有名な景勝豊かなこの森に、1800年代になると画家たちが写生に出入りするようになった。彼らはバルビソン村の宿屋ガンヌに滞在し、次第に現在バルビソン派と呼ばれるグループが形成されていった。画家たちはイギリスやオランダの写実的風景画の影響を受けながら、それまで理想化されたイタリア風の風景を描くことが一般的であったフランスの美術界に、実在の自然を描いた風景画を浸透させていった。

1849年以降サロン(官展)の審査員も務めたカミーユ・コロー(1796-1875)は、バルビソン派の中でも一世代上の開拓者とも呼べる位置にいる。当時の現代風景画の代表者と目され、明るい光に満ちた温厚な画風はクールベから印象派まで幅広い画家たちに影響を及ぼしたが、古典的な重厚さを漂わせる人物画も手がけた。フランソワ・ミレー(1814-1875)はグレヴイルの比較的豊かで堅実な生活を営む農家に生まれ、農民たちの労働や生活を宗教的な崇高さの感情をともなう暖かい眼差しで描いた。バルビソン派は日本でも好まれ、特にミレーの《落穂拾い》は親しみぶかい一点である。コレクションとしてはミレーの《種まく人》がある山梨県立美術館や八王子の村内美術館のコレクションが知られているが、今回紹介する中村武夫氏のコレクションは、上記のコローとミレーの絵画を中心にド・ラ・ペニャ、トロワイヨン、ルソー、ジャック、ドービニー、アルピニーなど、30余名の画家の約100点を含んでいる。

中村武夫氏は姫路在住の実業家であり、そのバルビソン派のコレクションは1999年に姫路市立美術館で「ミレー、コロー、バルビソンの巨星たち展」が開催されるまで専門家の目にもほとんど触れることがなかった。今回はコレクションとしては二度目の、そして関東圏ではまさに初めてのまとまった公開となる。前回の公開時に個人では国内最高峰とも称された、時代的にも内容的にもバランスのとれたコレクションは、一点ずつの質の良さだけでなく、コロー、ミレーという中心的な画家たちの画業を充実した点数で迎えることができ、またほかのバルビソン派の画家たちとも幅広く出会うことのできる好機である。



ジャン・フランソワ・ミレー  
《井戸から戻る女》  
1855-60年頃  
100.3×80.8cm

# モンマルトルの憂愁 ユトリロ展

Le Spleen de Montmartre Maurice Utrillo

あまたの芸術家の中で、絵を描くという行為を、宿命のように受け入れた画家は、そう多くはいない。たとえば印象派の画家のように、歴史に名を残した芸術家たちは、それぞれ、伝統に背を向け、旧態依然とした絵画様式に反旗を翻し、新たなものをつかもうとあがいていたのに対し、モーリス・ユトリロ(1883年～1955年)は、そんな過去や未来、あるいは周囲の思惑を知ってか知らずか、ただひたすら、あたかも呼吸をするかのように、絵を描いたのである。

ユトリロは女流画家シュザヌ・ヴァラドンの私生児として、パリのモンマルトルで生まれた。強烈な個性の持ち主であり、恋多き女であった母ヴァラドンは、息子モーリスの養育を、もっぱら彼の祖母に任せていた。母親の愛情に飢えていた少年モーリスが、寂しさゆえに、アルコール依存症に陥るのは当然のことだったのかも知れない。ユトリロが最初に入院したのは1904年、21歳のことで、以降、入退院を繰り返すことになる。

シュザヌ・ヴァラドンの息子として生まれ、多くの芸術家たちが闊歩したモンマルトルで育ったユトリロだったが、絵筆を取ったそもそものきっかけは、アルコール依存症の対症療法という、極めて無味乾燥なものにすぎない。ところが、ユトリロが描くその作品には、孤独な内面をそのまま反映したかのように、深い哀愁と詩情が漂い、人々の心を捉えずにはいられなかったのである。結局、アルコールとは縁を切ることができず、入退院を繰り返し、時には軽犯罪で逮捕され、無軌道な生活を続けることになるが、その一方で、ユトリロの作品は高く評価され、絵の値段は高騰し、最終的には名声と経済的な安定を得るに至るのである。

ユトリロといえば、独特の白いマチエールが光る「白の時代」の作品が思い浮かぶ。しかし、実際は、初期の後期印象派風の作品や、中期の重厚な色彩を用いた作品など、時代ごとに、様々な特色を顕し、ユトリロの芸術が「白の時代」だけではないことを示している。モーリス・ユトリロの著作権継承者であり、フランスのサワにあるユトリロ美術館館長を務めるジャン・ファブリス氏の企画・監修のもとに開催される本展覧会は、まだ絵を描きはじめて間もない後期印象派風の作品から、ユトリロの代名詞ともいえる白の時代の作品、そして画壇の流行児として名声を得、次第に華やかさを増していった晩年の作品までが出品され、ユトリロ絵画の集大成と言える展覧会となる。

日本初公開のものを含む、約80余点を展示、モンマルトルの画家ユトリロの、憂愁から栄光をまでの生涯に迫る。



《サン・ミッシェル橋》1904年頃



《モンマルトルのノルヴァン通り》1911年頃



《サン・リュスティック通りとサクレ・クール教会堂》1918年頃

## 学芸員によるギャラリートーク

一般対象…………… 4月27日[土]午後1時30分～  
5月18日[金]午後5時～  
小中学生と父母対象… 5月11日[土]午後1時30分～  
5月18日[土]午後1時30分～

all works : © Jean Fabris, 2002 © ADAGP, Paris & JVACS, Tokyo 2002

# NEWS

お問い合わせ先  
ハローダイヤル 03 3272 8600

財団法人安田火災美術財団 安田火災東郷青児美術館  
160-8338 東京都新宿区西新1 26 1 安田火災海上本社ビル42階  
電話=03 3349 8081 代表 ]/ ファックス=03 3349 8079  
インターネット=http://www.yasuda.co.jp/museum/  
交通=JR新宿駅西口、丸ノ内線新宿駅・西新宿駅、大江戸線  
新宿西口駅より徒歩5分

安田火災東郷青児美術館ニュース No.27

発行日:2001年8月1日  
発行:財団法人安田火災美術財団  
安田火災東郷青児美術館  
レイアウト:松吉太郎  
印刷:凸版印刷株式会社

**R100**  
古紙配合率100%再生紙を使用しています